

令和8年産大崎地域の 大豆作技術情報(第3号)

令和8年8月24日発行
宮城県大崎農業改良普及センター
TEL: 0229-91-0726 FAX: 0229-23-0910
<https://www.pref.miyagi.jp/site/osnokai/>

～栽培のポイント～

- ・天気予報に注意し、湿害を防ぐほ場管理を行いましょう。
- ・大豆の生育ステージを確認し、病害虫防除を適期に行いましょう。

1 気象経過

- ・5月前半は少雨でしたが、5月21日以降、**断続的な大雨**に見舞われました。
- ・気温は周期的に変化し、特に**7月第6半旬～8月第1半旬**まで**低温傾向**が続いたものの、大豆の生育を妨げるものではありませんでした。

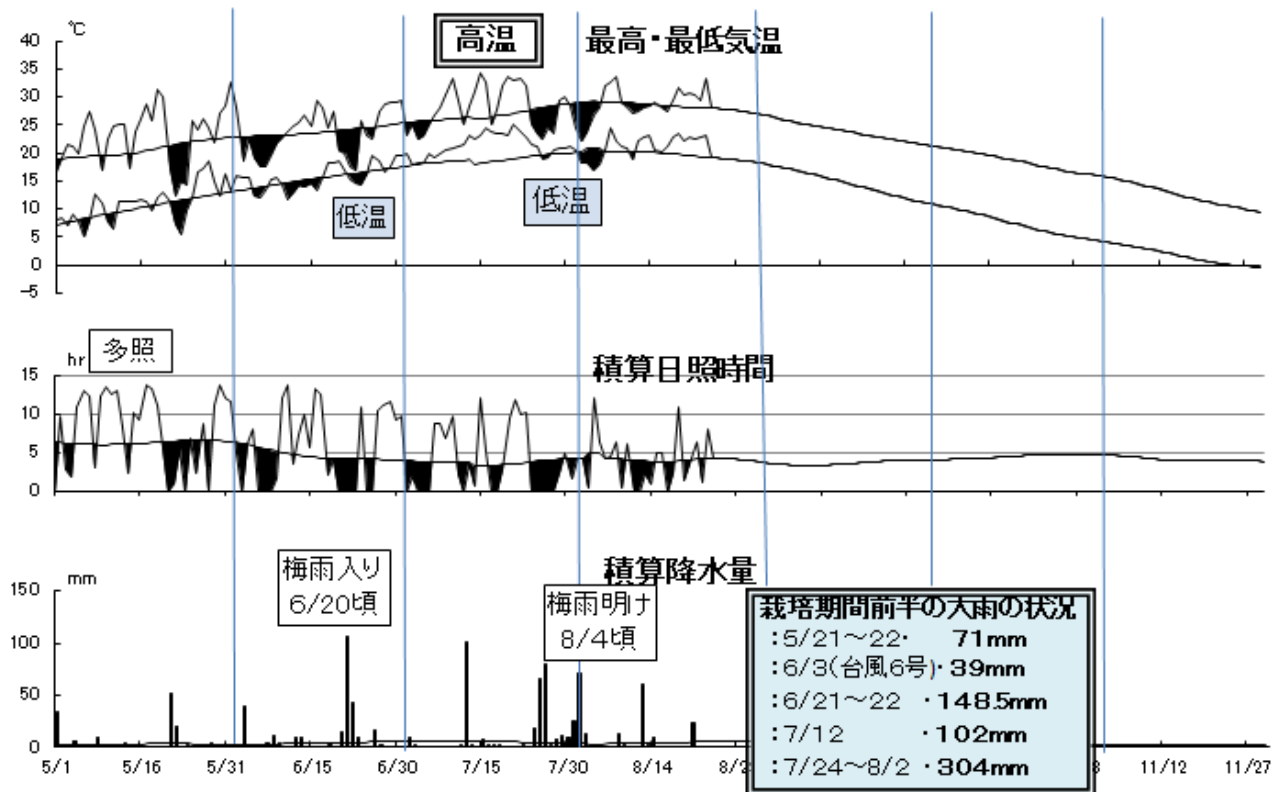


図1 大豆栽培期間中の気象推移(古川アメダス)

※1 実線又は棒グラフが本年値、点線は平年値

東北太平洋側 1か月予報 (8月8日から9月7日)

<向こう1か月の確率(%)>

	低(少)	平年並	高(多)
【気温】	20	40	40
【降水量】	40	30	30
【日照時間】	40	30	30

8月6日仙台管区气象台発表

<気温経過の確率(%)>

	低い	平年並	高い
1週目	50	30	20
2週目	30	50	20
3~4週目	10	30	60

2 生育概況(8月12日現在)

※地域全体について (○良好～△やや良～▲やや不良～●不良)

●播種適期となった5月21～22日の降雨により、播種作業の開始は遅延した。

○排水良好なほ場を中心に播種作業は降雨の合間を縫って進捗、概ね6月中旬までに大部分で播種を終了。

●表面水が滞留したほ場では長期に渡り播種作業に支障を来し、一部では播き直しを余儀なくされた事例もあり。

●播種はできたものの、天候により播種時処理除草剤の処理が遅れたほ場では効果が低減し、雑草が多発しているほ場も見られる。

△適度な土壌水分と気温により、発芽は良好(下位節間はやや徒長傾向)。

●発芽率が高かったほ場では栽植密度は高く、今後の過剰生育が懸念される。

△各品種ともに、開花期を過ぎ、着莢期を迎えつつある。

●長期の固定連作のため生育不良となっている事例あり。

=====

※生育調査結果(8月12日現在)

- ・調査ほ場は播種時期が前・平年より遅めでしたが、8月12日調査では、主茎長：短め～**長め**、 m^2 当たり主茎節数：平年並み～**多め**、 m^2 当たり分枝数：**多め**、となっており、今後の過剰生育(**蔓化・倒伏**)が懸念されます。
- ・開花期は、平年並み～遅めでした。

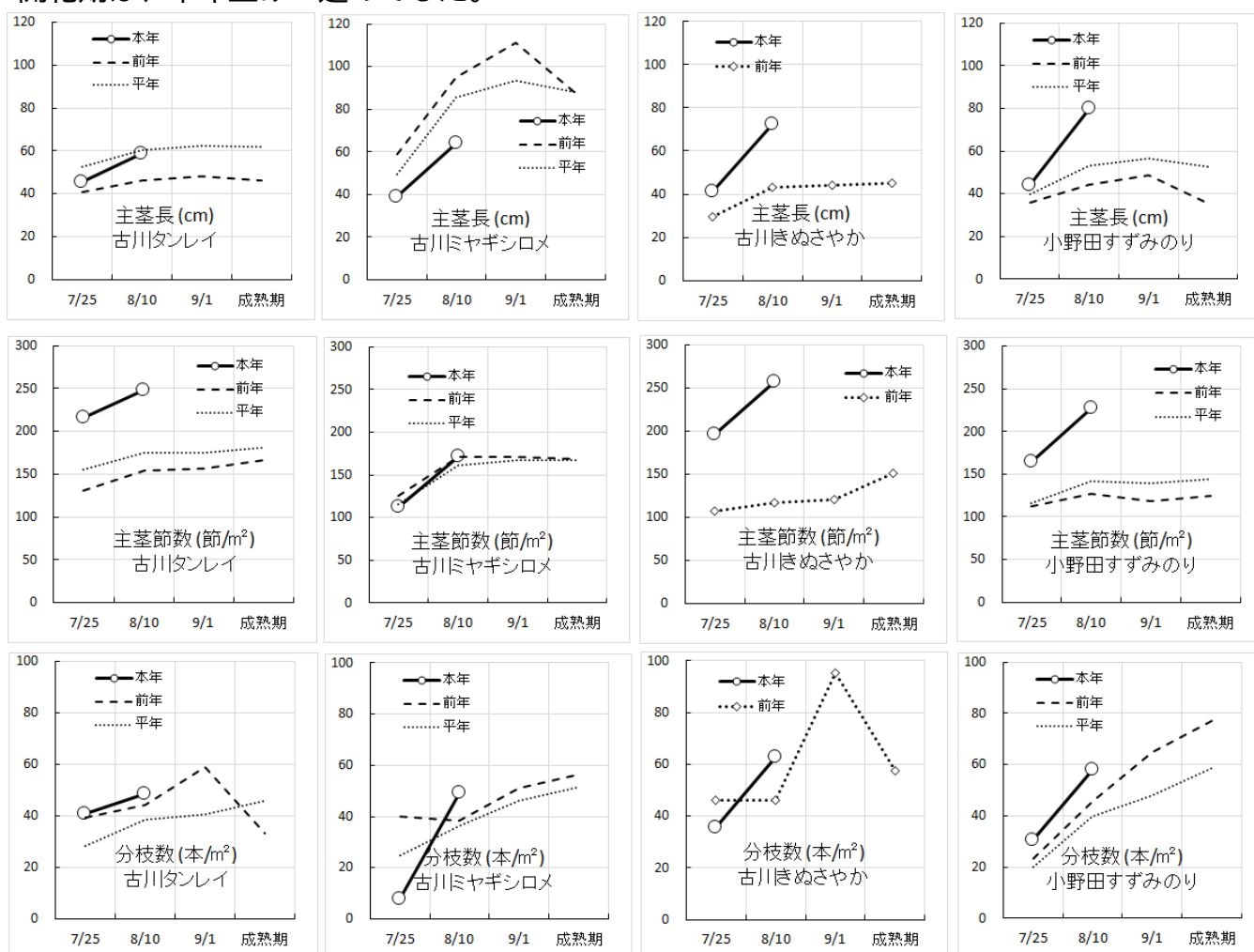


図1 生育調査結果 (m^2 当たり)

表1 生育調査結果（一株当たり）

地区名 品種名	区分	栽植密度 (本/㎡)	播種日	開花期	8月12日		
					主茎長 (cm)	主茎節数 (節/本)	分枝数 (本/本)
古川 タンレイ	本年	17.1	5月31日	7月27日	58.9	14.5	2.8
	前年比	139%	3日遅い	5日遅い	128%	116%	79%
	平年比	140%	4日遅い	3日遅い	128%	101%	89%
古川 ミヤギシロメ	本年	11.5	6月12日	8月10日	64.1	14.9	4.3
	前年比	117%	6日遅い	8日遅い	67%	86%	110%
	平年比	117%	8日遅い	7日遅い	67%	91%	114%
古川 きぬさやか	本年	17.2	6月2日	8月4日	72.3	15.0	3.7
	前年比	149%	3日遅い	8日遅い	167%	147%	92%
小野田 すずみのり	本年	16.6	6月12日	7月27日	79.8	13.8	3.5
	前年比	120%	±0日	1日早い	179%	149%	106%
	平年比	133%	3日遅い	1日早い	150%	120%	110%

※1 平年比は、前5カ年（令和3年～令和7年）の平均値との比較。

ただし、小野田すずみのりは前3カ年（令和5年～令和7年）の平均値との比較。

3 今後の栽培管理のポイント

(1) 湿害

▶湿害対策 —降雨が続く場合—

子実が肥大する生育後期の土壌過湿は、根の呼吸阻害だけではなく、根粒菌の活性低下による窒素供給の抑制を引き起こし、減収につながります。

○降雨の前後に排水溝や明きよを点検し、排水が滞らないようにしましょう。

○水が溜まったところは溝を切り、明きよに繋げ、排水を促しましょう。

(2) 病虫害防除

▶紫斑病 —開花期後20～40日に1～2回防除—

○「タンレイ」は紫斑病抵抗性が“やや弱”であり、連作ほ場や成熟期に降雨が多い場合は多発するので、2回防除を徹底しましょう。

○同一系統薬剤を多数回散布すると耐性菌が発生する恐れがあるので、2回防除の場合は異なる系統の薬剤を使用しましょう。

○収穫が遅くなると発生を助長するので、適期収穫に努め、できるだけ早く乾燥させましょう。



写真1 紫斑粒

▶マメシンクイガ

—8月下旬に1回目、その7～10日後に2回目の防除—

○羽化した成虫やふ化直後の幼虫に対する防除が効果的です。

○大豆を連作すると、越冬幼虫が増加し、食害の発生が多くなるので、連作ほ場の発生状況に注意しましょう。



写真2 マメシンクイガ幼虫

▶フタスジヒメハムシ —8月下旬～9月上旬に防除—

○8月下旬頃までの若莢を食害することで、そこからカビが入り込み、汚粒（黒斑粒）や腐敗粒となります。作付け初年目から被害が出やすい傾向にあります。



写真3 フタスジヒメハムシ成虫

▶ジャガイモヒゲナガアブラムシ —8月～9月に防除—

○8月下旬～9月上旬に急激に発生、吸汁害に伴う早期落葉による収量・品質の低下だけでなく、全面枯死に至る場合もあります。

○吸汁痕はべと病と似るので、葉の裏面のアブラムシの有無で確認してください。

防除に際し薬剤は、葉の裏面にまでかかるようにしっかりと散布願います。

写真4左 ジャガイモヒゲナガアブラムシ吸汁痕

写真4右 ベと病病斑



▶吸実性カメムシ類カメムシ類 —他の主要害虫との同時防除—

○莢が着き始める頃から莢が黄熟する頃までの莢内の子実を吸汁加害します。越冬地（雑草地、山林等）付近では発生が多くなるので注意しましょう。



ホソヘリカメムシ



イチモンジカメムシ



ブチヒゲカメムシ

写真5 大豆を食害する主要なカメムシ

○防除は着莢期から子実肥大中期を重点に、他の主要害虫と同時に2回以上実施するようにしましょう。

なお、散布後もほ場に「吸実性カメムシ類」が確認される場合は、追加防除を検討しましょう。

※病害虫防除所7月23日発行の「発生予報第4号—大豆—」では、7月13～16日の巡回調査から、8月下旬までの発生量は「紫斑病」は「並」、「吸実性カメムシ類」は「やや多」、「フタスジヒメハムシ」や「やや少」と予想されています。

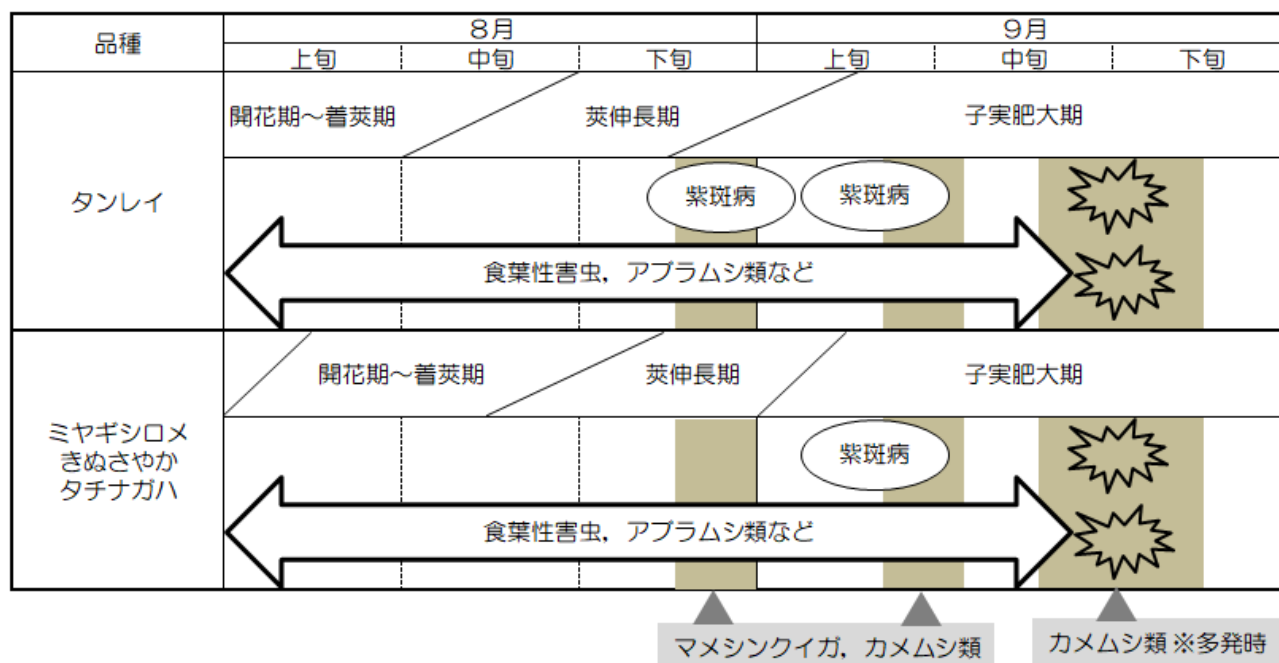


図2 病虫害防除体系例

◆◆◆◆◆農薬危害防止運動（6月1日～8月31日）◆◆◆◆◆

6月から8月にかけて、農作物等の病虫害が発生しやすく、農薬を使用する機会が最も多くなる時期です。農薬安全対策の不備や不注意等による事故が発生しやすくなるため、農薬使用による危害防止と環境に配慮した適正な農薬の使用を徹底しましょう。

運動のテーマ 「使用前、周囲よく見て ラベル見て」

「大崎地域の稲作技術情報」、「大崎地域の大豆作技術情報」、「大崎地域の麦作技術情報」は、当普及センターのホームページでもご覧いただけます。インターネットで「大崎農業改良普及センター」と検索または右のQRコードを読み取ってください。

